

大桑論文に対するコメント —多様な選抜区分で構成された 学生集団追跡調査の意義—

九州大学 柴田 洋三郎

本論文は、平成2年から宮崎医科大学で実施されてきた、多様な選抜査定区分による入試の追跡調査の報告である。この多様な判定基準による多面的入学試験制度は、導入当初から大いに注目され、関係者の関心を集めてきた。

一つには、前期後期合わせて、五区分もの異なるカテゴリーにより志願者を選択する方式であり、とりわけ関心を集めたものとして、独自の指定調書と調査書の評価により査定が行なわれた点である。さらに、センター試験成績では前期に理系と文系、後期に総合点が用いられ、前期で小論文と指定調書が課せられているが、この方式のもう一つの特徴として、これらの選抜因子を合計して順位付けをするのではなく、それぞれが独立した単独の評価基準として個別の査定区分に用いられ、各区分ごとに別個に合否判定が行なわれるのも特異な点である。

医学部という職能人育成を主な機関教育目標とする分野にあっては、多様な選抜の実施は言うは易く、実行は極めて困難である。独自の入試に取り組み、実績を挙げてこられた関係各位に、まずもって敬意を表したい。さらに、導入後も継続して追跡調査を実施し、その点検・評価からの解析にもとづき新たな改革に取り組み、その検討の上に、次のステップの改革を計られた過程、いわゆる点検・改革サイクルが実行されたことも特筆すべきである。

本稿では、とくに2つの点に関してコメントしておきたい。

一点目はこの制度独特の自己申告の指定調

書による選抜である。これは昨今導入が広まっている、いわゆる「日本型アドミッションオフィス的入試」の先駆けと見なすべき試みと評価される。開始当初、その実施にあたっての困難や苦勞、とくに自己申告による記載内容の確認とその評価の難しさが喧伝され、この指定調書選抜には近寄り離い印象を受けていた。初期には優れた学生が選抜できるといわれていたこの制度が、十年を経過して今回の改革で取りやめとなった経緯について、受験生側の対策によるのか、あるいは平成8年度からの新教育課程のゆとり教育の影響なのか、あるいは他の事情からなのか、是非今後明らかにされることを期待したい。一方、十年間の実施結果から、小論文が入学後の成績に最も信頼のおける指標となるとの結論が出され、今回の入試変更に取り入れられたことは参考となろう。しかし、これはやはり長年にわたる同校での“小論文”試験の経験にもとづいた問題内容と構成の蓄積の延長上にある、試行錯誤を重ねた末の結論であると心しておかねばなるまい。

二点目として、この選抜の真価を別の側面から指摘しておきたい。それは総合点方式によらない、独立した因子にもとづくカテゴリー別の査定方式という点である。この特徴はあまり着目されていないようだが、基本的には互いに独立の評価尺度にもとづく多様な査定基準により選抜された学生群から構成されているわけであり、この混成集団の入学後を追跡調査する意味は極めて大きい。

一つには、選抜プロセスの詳細が詳らかにされていないため、あくまでも図1などの

データからの推測ではあるが、本報告書でも言及されているいわゆる「打ち切りデータ」による解析の限界は、通常の入試追跡調査と比較にするとこの集団ではかなりの程度緩和されていると推測できる点である。

これを多少ともランダムサンプルの性格をもつ集団についての追跡結果として改めて見直してみると、センター試験と入学後の成績全体との関連で興味深い追跡結果が示されている。すなわち、センター試験文系とくに英語と入学後の成績全体に正の相関があり、逆にセンター試験理系とくに数学との間に負の傾向がみられること、またこれらを合計したセンター試験合計では両者が相殺された総合点であるが故か有効な指標となり得ないという解析である。これは日頃英語・数学について感覚的に言われていることが、この集団での「打ち切りデータ」効果が弱いために、ある程度確認されたと考えることもできよう。

この他にも、今回の追跡調査の結果は色々な示唆に富んでいる。とくにこのような多様な選抜によって入学した学生集団でも、その群間で少なくとも学習勉学面ではさほど明確な差異が生じず、深刻な影響が出てこなかったことである。これは、入学後の指導や教育の効果が加わった結果であるから、ある意味では当然のことであろう。本報告には、学生個人に対する指導やガイダンス、入学時の履習歴に対応した個別指導体制など、入学後の対応についての記述がないので、即断できないが、宮崎医大における入学後の教育指導体制が健全に機能した成果とみることができよう。この点今後我々が多様な選抜のありかたを模索する際に、重要な指針となることであろう。

さらに今回は主として学力面の追跡調査であったが、この学生集団は多様なある意味で不均一な集団であり、学力以外の面でも様々な分析の対象として興味深い。たとえば、現在関心の高まっている大学生の学生生活の実

態や正課外教育やクラブ・サークル活動において、このような多様な学生群を意図的に選抜したことによる学生生活の活性化などの波及効果や種々の影響についても、別の機会にでも御報告いただけることを期待したい。

今後の要望として、この区別分選抜で構成される学生集団は入学後の成績追跡調査の上で、「打ち切り効果」をある程度を免れた貴重なサンプルであり、是非とも彼ら全員が卒業に至るまで、追跡と解析を継続していただくよう、切に希望するものである。